

開拓の歴史地理学的研究

——鬼面川扇状地を例として——

長井政太郎

一、はしがき

米沢盆地の鬼面川扇状地は豪族屋敷やら板碑等の遺跡が多く、又若干の記録も残っているので筆者は⁽¹⁾復原的な集落発達史を研究して来た。⁽²⁾⁽³⁾散居の起源を明らかにする目的からの研究も試みたのであった。日本地理学会の山形大会の際にも之の一部でエキスカーションで討議を実施し、IGUのエキスカーションでも討議場となった地域があった。

今日まで若干⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾の記載も試みたのであるが、多くは地方的出版物であったから新しい資料を加えて改めて記載して見たいと思う。

- (1) 拙稿 米沢盆地西側の集落 斎藤報恩会時報 第一二八号 一二九号 昭和十二年
- (2) 拙稿 散村の発達—特に鬼面川扇状地の場合—山形大学紀要 人文科学 第二卷 第一号
- (3) 拙稿 置賜地方の豪族集落 山形県文化財報告書 昭和三十一年三月
- (4) 拙稿 東北の集落 古今書院
- (5) The Homestead Village in the Yonezawa Basin. International Geographical Union, Washington.
- (6) Die Entwicklung der Siedlungs formen. Besonders im Nordosten Japan, Geographische Rundsehen.
- (7) 米沢盆地の環溝住宅 地域 第八号

二、自然環境

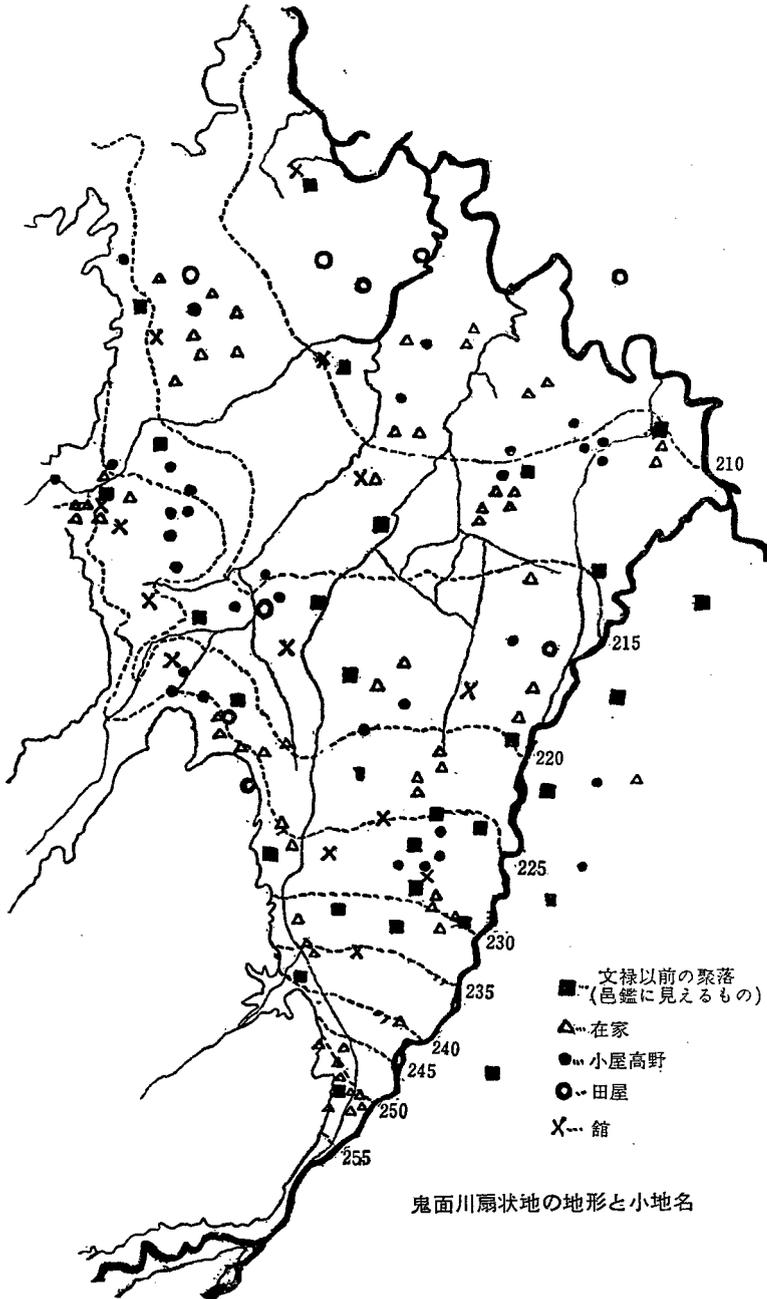
米沢盆地の南西部を占める四百米内外の低い玉庭台地の下に大樽川、小樽川の合流した鬼面川が広い三角形の扇状地を形成している。

米沢盆地西部の成嶋で二五〇米の高さで、扇端の西大塚が二〇八・六米でこの間に約四六米の落差が見られる。安部で二二四米、高豆薙^{こまづき}二一一米と扇頂から約三籽程の間は傾斜が明らかであるが、時田の附近からは部分的な凹凸が認められるだけで殆んど平坦地となる。特に西を限り、白川流域との境をなす眺山の丘陵に近接した地域は低平である。

さいわい耕地整理用の一米コンターの地形図が出来ているので微地形が図上で判別出来るのであるが、時田の高田附近から大川の新町に至る間に五―六米の低い段丘が認められ、鬼面川沿いの自然堤防と、それより西北の方向に延びた微高地が認められる。中でも高山の八幡堂附近から荒屋敷北部に至る隆起軸は顕著なもので、それにほぼ平行する誕生川^{たんじょう}沿いに窪地が認められ、その北東部に当る坂水から吉田の方向に連なる隆起帯が存在する。更にほぼ扇央の熊野堂から長橋部落の方向にも低い隆起軸が見られ、成島から吉田の方向に延びた隆起軸と平行する窪地帯も認められる。

このような微起伏は水系の方向を決定し、それに沿って流水を飲用する農家が分布しているのであるが、江戸時代初期から盛んになった開拓事業でも平坦化が進められたであろうし、特に最近の耕地整理がその平坦化を一層促進しているので、現地においては殆んど微地形の居住に及ぼしている影響を認めにくくなっている。

7 開拓の歴史地理学的研究



この地域が微起伏の甚しい地域である事は谷地と呼ばれる湿地を意味する小地名が二三、沼が八、深田が六、窪が八つあるのに、微高地を意味する島と高田が各九つづつ、台が六、高畑が三つも見られるのである。

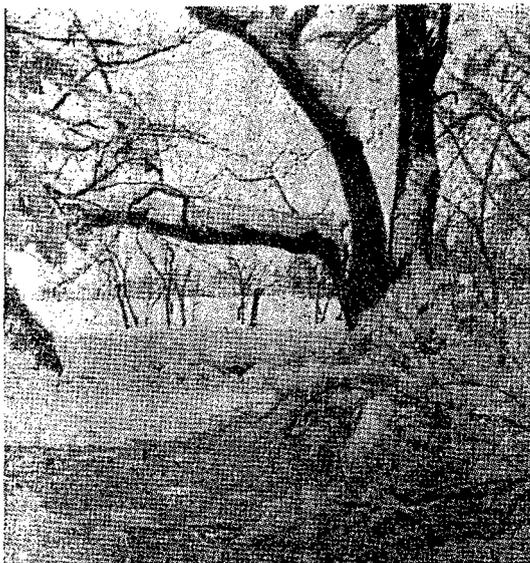
海拔二三〇米線を中心とした幅広い地域は礫混りの緻密な堆積層から成り、その上の砂土層との境からは数多くの泉が湧出している。扇頂から湧泉帯までは飲料水が良いのであるが、その下は井水が出にくく、出ても金気があるので最近までは流水飲用の慣習が行なわれていた地域である。

湧泉の中で八幡清水、御釜清水、館清水、長清水は水量が多いので飲用に供せられるのみならず、鬼面川、誕生川、犬川、黒川等と共に扇面の灌漑用水として利用されていた。

六十年程以前から鉄管掘りが始まったので流水飲用者が減っているが、それでも散居地帯の事とて容易に深井戸を掘るわけにも参らず、而もしばらくすると水質が変化するので相変らず流水を飲用しなければならない人々も少なくない。

三、集落の発達

扇状面上部の成島には米沢城主が歴代崇敬していた成島八幡神社があるが、そこには(1)正安二年長井掃部守大江朝臣宗秀が納めたのを最古とする数多くの棟札が残っているが、この神社に近接して一月在家から十二月在家までの在家と呼ばれる小字が分布している。多くは二―三町歩程度の広さの田地であるが、三月在家の鈴木角兵衛家では今でも祭礼に三月在家と記した高張りを持って参列する慣習となっている。在家屋敷にはそれぞれ氏神が祭られ神社と特別関係にあった家柄であることがわかるが、山形郊外の柏倉門伝にも一月田から十二月田まで備えられた八幡神社があるのを見るとそれぞれの在家が毎月の神社の奉仕を務めて来たものであったらしい。



川西町三井 島貫家の館堀と梨の大木

十二の在家と近接して(4)万泥まんどろと呼ばれる地名が見られるが小松町に近い政所と同様に成島庄の政所の所在地でなかったかと考えられるのである。

犬川の出口に当る小松附近が古墳の多い地域で古く開けた事が想像出来る地域であるが、此処の諏訪神社も古いものらしく、(4)暦仁年中大江時広が社殿を設け、至徳年中に伊達政宗が再建したものであるという。鬼面川に沿った吉島の八幡神社にも(4)嘉暦二年津島村と刻まれた湯釜があつたというから事実とすると頗る古い神社であつたわけである。

事蹟考によると伊達の老臣湯野目肥前が再建したとある。対岸の(4)夏刈には有名な巨刹資福寺があつてそこには永仁二年の巨鐘が納められてあつた。最近鐘が失なわれてしまつたが、伊達家の墓が今なお寺跡に残されている。

夏刈に近い吉島の三井には三十間四面の屋敷を三十一六間幅の館堀で囲み、内側に一間幅の土手をめぐらした長屋門を構えた旧家(4)島貫孫右衛門家がある。土手の一隅に根囲まわり四二五米、高さ十五米の部内で一番古いと見られている梨の古木があつて県の天然記念物に指定されている。屋敷が出来てから植えられたものであろうが、この外に地方に珍らしい栗の巨木もある(4)。屋敷の

西側に屋敷神三宝荒神が祭られ、元禄の鰯口が懸けてあるが、その隣りに「治安二年□□孫右衛門」と刻まれた古い鰯口が大正十五年頃迄あったのが盗まれてしまったという。社殿の側には古い大型の板碑が二三体あるから小野良実の次男孫右衛門尉良春の子孫の口碑は問題外としても中世以降の土豪屋敷である事は確である。

島貴家の家屋の外側に十四間幅の堀田と呼ばれる深田があつて外堀もあつたらしく見えるが、明暦の高物成新帳には千石以上の大高持であつたといひ、明治初年の土地台帳によると水田約五町歩、畑二町五反歩、それに近接した原野七反歩を所持していた。

このフィールドでは犬川の(9)竜蔵神社前の大板碑しか年号の見える板碑は見られないが、この方は弘安二年三月十八日在銘のもので頗る古い。在家や邑鑑に見える古い集落、又は何々屋敷と呼ばれる地域には数多くの板碑の分布が知られている。正確な分布図は出来ていないが、微高地とその斜面と思われる地域に多く見られることが確である。そのような地域の方が比較的早く土豪等の居住が行なわれていた事を示しているのであろう。

大日本古文書所収の伊達家文書と(10)編年文書によると永正十六年の項にかうづくの郷三丁目の内本館在家、ちやうゑん在家、管藤次郎在家、大永三年の項に大塚の内とうほう在家、安藤屋敷、天正八年の部に吉田郷の大原新左衛門在家、堀金の右馬助在家、天正十年に桐原の佐藤九郎在家、十三年に平柳郷の坂水在家、天文三年の部に年貢五百文の堀金の上野在家、成島庄釜地のきうてん在家、吉田北方の内彦八在家年貢二貫五百文の堀金柴田在家、天正十四年に吉田の九間在家、小菅のおさきみ在家、草荊在家等が古い記録に見える。現存する在家名の小字は三町歩から八町歩位であるが、記録に出て来るのは年貢一貫五百文から三貫文位のものが多い。記録に見える在家の大部分が消え失なわれているが、坂水在家は現存する。新左衛門在家は大原新左衛門在家であらう。

在家と呼ばれる地名は成島に最も多く、その外では高山に六、吉田に八、小松に五あり、フィールド内では合せて六八種数えられる。

平内、仁平等と人名を以て呼ばれるものと吉野、但馬等地名で呼ばれているものも少くない。

鹿小屋に関するものとしては

下長井庄山の郷しかこうやゆいしよの事、永代其身地主たるべき者也。為後日仍如件、

天正十一年亥未四月十三日 印

ふせのしなの

下長井の庄高山之郷之内しかこうや在家年貢三貫文の所、此内田錢六百文引候、其外如前々地頭に無違乱可相勤者也。仍如件

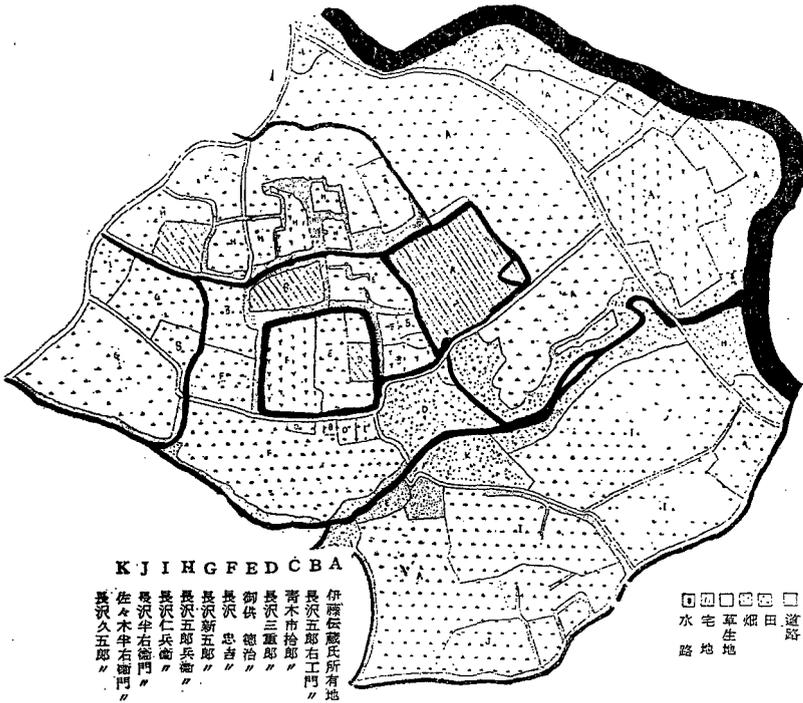
天正十四年丙戌十月十五日 政宗 花押

布施助右衛門どのへ

と二通の記録が横沢家に残っている。古くは在家と呼ばれていたものなのか、鹿小屋と呼んでいたものに在家を附したのか明かでないが今日では鹿小屋といい、三町二反六畝程の広さがあるから布施助右衛門が地主たるべき事を認められていた頃の土地がそのまま残っているものと思われる。ここの切絵図には三軒の楯堀のある大きい屋敷が見えるから助右衛門はその何れかに居住していた者であろう。彼れが伊佐江に移ってから佐藤又右衛門家が古屋敷から移って来たらしい。佐藤家は代官所直扱いの郷土で、院殿号を許され、八町歩程の田地を所持していた。

孫六在家は屋敷が八畝で、田が八反三畝八歩、畑が三反六畝しかないが、館の在家は三町八畝二十六歩で、谷地在家は八町程、仁平在家は一町六反四畝歩である。

堂在家には斎藤家が居住しているが、一町八反九畝二十三歩の田地をそのまま所持している。加賀在家、若狭在家に



高山伊藤伝地籍図

もそれぞれ楯堀をめぐらした大きい屋敷とそれを囲む田地があった事が明かであるから何々在家と呼ばれている地名は何れも在家屋敷のあった土地であろう。

現存する在家名の地名は扇状地の山麓に近い地域と微高地、それに用水路に沿う傾斜地等に分布するのを見ると、そのような地域が比較的早く開け、そこには一―三町歩程度の田地を経営する在家屋敷があったらしい。

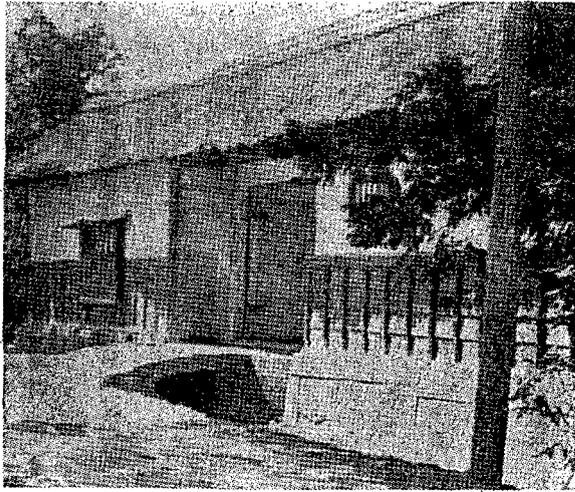
高山には伊藤伝右衛門四郎孫七、清七屋敷、長者屋敷、嘉治屋敷等の人名に因んだ小字名が多いが、この内伊藤伝には楯堀をめぐらした千坪程の屋敷跡と同じような大きさの屋敷を持つ伊藤伝蔵家があった。旧家がそのまま地名となっているのであろうが、何々屋敷と呼ばれている地名には在家

と同じように古い時代から呼ばれていたものもある。即ち荻生庄の(9)応永十三年の記録には九郎二郎在家と共に小池屋敷、進藤屋敷、いもり屋敷、高島屋敷と並んで記されているが、この外にも新屋敷、はらのえやま屋敷、大蔵の神田、八幡吉詳田等も記してある。

- (1) 阿部正巳 山形県の金石文 山形県史蹟名勝天然記念物調査会報告
- (2) 拙稿 在家と村落 山形大学紀要 人文科学
- (3) 拙稿 山形県地名録 山形県郷土研究叢書
- (4) 東置賜郡史
- (5) 置賜の家族集落 山形県文化財調査報告
- (6) 橋本賢助 山形県の名木 山形県史蹟名勝天然記念物調査会報告
- (7) 川崎浩良 山形県の板碑
米沢図書館所蔵
- (8) 山形県史
- (9) 山形県史

四、邑鑑に見える集落

邑鑑には成島、藤泉、西江股、尾長島、下平柳、洲島、吉田の鬼面川沿いの古い集落が見え、扇頂部に近い湧泉帯を中心とした地域に、小山田、轟、一ツ漆、長橋の四つ、山麓に上、中、下の三小松と奥田、黒川に沿って黒川があり、その支脈に沿って時田、犬川に沿って高豆薙があり、下小菅、苳のぞみ、高山は誕生川に近接して分布し、堀金は川に離れていた。東西大塚は何れも扇端の低平地に位置しているが、元来は大塚のあった土地に因んで発生した地名である。



川西町 大塚の牛谷家長屋門

大塚には犬川と松川との間を利用した城があった。土塁や堀跡等も残っているが、享保の⁽¹⁾色摩翁助の記録によると本丸は南北八〇間、東西五七間、それに五〇間余の二丸があったといふからこのフィールドとしては小松城と並ぶ城であつたらしく、政宗の臣⁽²⁾大塚左衛門佐宗頼が居住したといひ、岩出山に移つてからは牛谷氏が留守を守つていたらしい。

牛谷家は慶長頃二五〇石程を領し、最上戦争にも参加しているが、長屋門と館堀等に郷士の風格を備えている。弥陀仏を陽刻した大型の板碑を祭っているが、是れは楯堀を堀つた時に発見したものであるといふ。

武士としては甚五右衛門を名乗り、同時に百姓としては藤内と称していた。大塚には慶長時代荒開百石を給せられた⁽¹⁾筑後浪人又は国分浪人という高橋九兵衛が居り、三十石を給せられた青木十三郎、寒河江牛之助、平藤兵衛、黒沢清助、皆川三右衛門等の郷士が居り、多くは家中の者を従えて最上戦争に参加し、大塚堀が出来てからは開田に尽力している。寒河江、皆川は後者の著しい人物であるが、⁽²⁾慶長八年迄は勅進代で五百石を開いた大津賀監物等もいたと伝えられている。

小松は犬川の出口に当る溪口集落で市場町として栄えていたが、古くは大塚城と並ぶ城下町であつたらしく、⁽³⁾元中

応永頃は伊達の家臣が居城し、牧野氏が湯野原に逃亡してから廢城となったといい、上小松の大光院の附近には原田甲斐の居た楯があったと伝えられる。

高山の犬川岸には⁽⁸⁾岡崎御殿と呼ばれる一町歩程の楯跡が残って居り、岡崎太郎義種三十三世御供氏建立とある新しい五輪塔の墓がある。高伝寺伝によると左閩村地主御供三郎左衛門利政弘治二年上林に建立した寺であるとある。

源内翁手記に見える六十一石の御供清三郎も一類であろう。

邑鑑に見える集落には洲嶋を始めとし、大概楯又は城と呼ばれる地名が見られるが、長井時代か伊達時代にこの附近を開拓して支配していた土豪又は武士が居住し、それを中心として集落が成立していた事を物語っているであろう。

(1) 青木源内翁手記

(2) 拙稿 山形県地名録

(3) 東置賜郡史

五、高野の成立

庄内には興屋又は興野と書いてコーヤと発音している地名が百に近く見られるが、置賜盆地にも高野又は小屋と書いてコーヤと呼んでいる地名が少くない。このフィールドとそれに近接した地域でも二九ばかり数えられるのである。松川、鬼面川沿いにも分布し、吉島に七つ、中郡と犬川に各五つ、小松に四つ、六郷に三つとまって分布しているが、その分布は扇頂部に比較的少く、在家よりは若干低い微低地に多く分布しているように思われる。

古い記録に出て来るのは太天耕屋だけで永正十六年の伊達家文書に見られるのであるが、芳野小屋には天正六年遷宮、伊藤と棟札に記されたものが残っている。下小屋には坂野家と呼ばれる旧家があったが、此家の先祖の命日は慶長三年一〇月一日であった。

赤湯の丹波館には「櫛塚村の内高の外屋ち、古川の跡五年かうやに相定候儀、次第に開作可仕候。五年之間は諸役あるまじき者也。慶長四年三月十二日、春日[㊦] 赤湯村主殿どのへ」との墨付が残っている。即ちかうやに指定された谷地の開拓を許され、五年の間の諸役を免ぜられているのであるが、このような形式の開拓が室町時代から慶長元和頃まで行なわれていたらしく、仙台領内には寛永になってもこうやの扱いがあったのである。このような開墾指定から高野の地名が発生したと考えて良いと思うのである。

丹波館主石岡家は堺主殿と言ひ、蒲生の遺臣で高野を与えられていたが、浪人となり、慶長四年に櫛塚と俎柳の後在家等の開墾許可を与えられたのであったが、最上戦争に動員され、春日右衛門の手に属して出陣したので、開拓地の内百石を与えられて北条郷十八騎の一人として土豪化した家であった。正保の古図には十三名程の名子を従えて記されている。

遠江小屋は一三戸、時田の西小屋は一六戸、荒小屋一一戸、西小屋と太夫耕屋が各一〇戸、鹿小屋が七戸その他吉野、但馬、堂田等の高屋にもそれぞれ小集団の人家が居住し、附近の散居地帯とは異った集落分布を示しているのである。

六、扇面の開拓

邑鑑には村々の免付けが記されてあるが、免六つ以上となっているのは上小菅、西江股だけで、五つ以上は桐原、下小菅、成嶋の三部落となっている。是等は何れも扇頂に近い集落であるから鬼面川の水を充分に利用出来る扇頂部が古くから開けた上田地帯であつたと見える。

轟、小山田、長橋、時田、大塚、高豆蔻、尾長嶋、上小松が中位の生産地で、堀金高山その他の水利が後世開けた扇尖部の村々は二つ以下の免付であつた。

上杉藩では関ヶ原合戦の後領内の開拓を計画し、水利の不便な地域に揚水工事を実施した。鬼面川扇状地は湧水や溪谷の水を利用して部分的に開拓されていたので此処に鬼面川から揚水する高山堰と堀金堰を開鑿し、次いで扇状地下部に当る大塚、犬川方面に長井盆地の白川より揚水して大塚堰を引き、次いでその上流から揚水した長堀堰を引水して小松、犬川方面に灌水するようにした。その後も玉庭台地に溜池を設けたり部分的な改良工事が進められたが、扇状地面の大部分の地域は不完全ながら慶長前後に完成した水路で灌水されることになった。

堀金堰は横沢家の旧記によると慶長九年堀金の修験者実相坊が藩公夫人の安産を祈った功によって、彼れの希望がかなえられ鬼面川より揚水することが許され慶長九年頃完成したものであるという。小山田の清水と長清水等を利用して、それに鬼面川より引水していたのを拡張したもので、広幡、六郷、吉島、中郡等で六二〇町余をその灌域としている。

高山堰は成嶋、小山田、上下小菅、高山、苅、時田迄の間に五六〇町歩の灌域を持っている。小さい堰があつたの

を(慶長九年頃高山、時田、菘の三部落から代錢を出して水上村々の了解を得て、宮在家堀に改めたのであるといふ。然し、時田方面まで十分に水が届くようになったのは正保元年以降の事で、その結果時田の西原が開田されたのである。邑鑑の草高を百とすると享和二年に高山が一七二、時田が二〇〇(寛政二年)となっている。是れは水路完成後の開拓に依るものであらう。

鬼面川沿いには六百石堰(吉島で五〇町歩)元堰(吉島一四〇・七町)尾長島堰(尾長島吉田で一三八町五反)田屋堰(吉島六町)洲島堰(下平柳洲嶋一四一・八町)と黒井堰等で灌漑されている地域もあるが、尾長島堰や田屋堰等は寛永以前からのものである。

大塚堰は大塚の寒河江家の記録によると「当村之儀往古用水堰無御座大旱損所に御座候処、先祖源兵衛義堰見立仕(中略)慶長十四年より同十八年迄添川村分白川より普請仕申処成就仕」云々とある。寒河江家は元和年中に大塚の原野菊田各地等六所約五百石を開き、新しく百姓二十人取立てた功に依り、子の代迄新田の内五〇石を知行として与えられ、(2)免許職として郷士対遇を与えられた。大塚村四八五町歩がこの堰の灌漑となっている。

長堀堰は大塚堰より上流から揚水して犬川、下小松方面約一五〇町歩、高山堰との混合地帯を加えると約一千町歩を灌漑とする水路である。

嘉永五年の竹田家所蔵の申請書に拠ると「三小松田用水の儀は往古犬川より水引取り相用い罷在候処、早損地多分罷り出て甚難渋仕候処、寛永年中下小松寺島他屋元地主蒲生飛驒守御家来、後ちの上杉家々来度部久右衛門殿用人小守甚左衛門と申す人と、下小松村肝煎島貫源兵衛と兩人にて白河より水引取申候事を発企し(中略)下小松村にては山際通りにて別して早損仕り、既に下小松村田中在下と申処にて年々早損に逢ひ一部落悉皆中小松在家へ移転し御田

地の荒地に罷成り申有様」とある様に下小松村方面の人々の主たる希望で寛永二年に起工されたが、費用その他の関係から中々完成せず、完成したのは正保元年であった。

下小松の草高が邑鑑を百として⁽⁸⁾寛永十六年二八七(二、三七〇石)となっているのは此の水路で開田が進んだ事と思われる。⁽⁹⁾元和元年の新開と畑直して一二八石の新田があったのであるから勿論長堀堰だけで開田が進んだのではない。安永三年になると三二〇となっている。

他屋地頭度部久右衛門は代官であったが下小松の他屋を開拓したのでその問題は後述したい。

大塚は邑鑑に二千二八石とあるのに⁽¹⁰⁾明暦三年には六千九百六十石となり、天保七年には実高七千六百十三石、届高二千八十石となっている。従って戸数も邑鑑に一二三であったのが、天明七年三五六、⁽¹¹⁾明治十年には更に五〇戸を増しているのである。

(1) 広幡村誌

(2) 赤湯町丹波館所蔵 免許百姓面附之覚

(3) 河西町竹田源右衛門所蔵

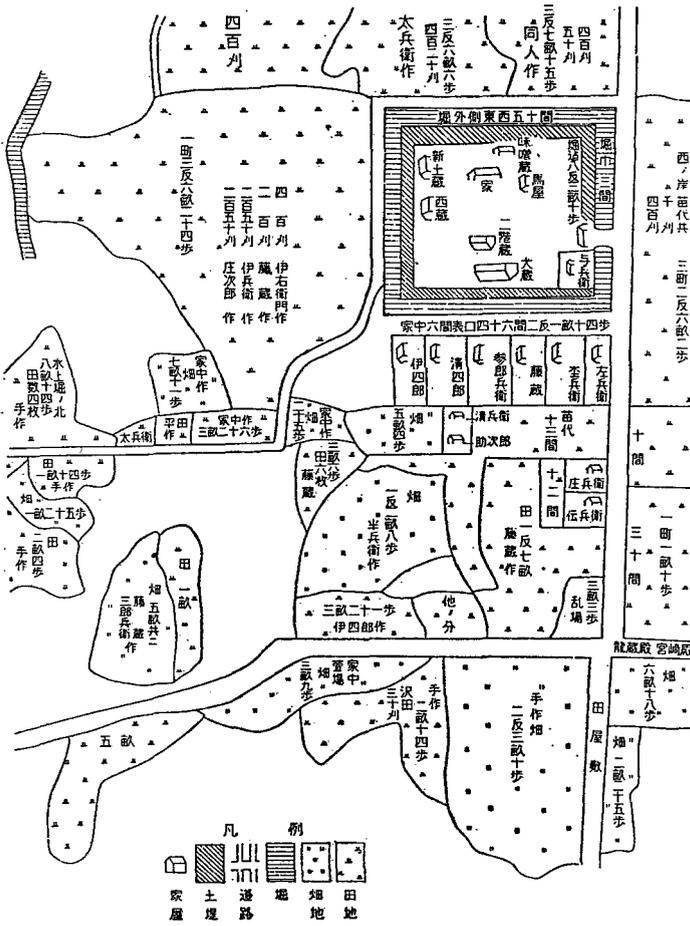
(4) 山形県地図

七、田屋集落

上杉藩は慶長五年三十万石に減石されてから武士の開拓を許し、寛永二十年には⁽¹²⁾「諸給人代官とも在郷に有之新田開作、公儀御面に有之知行高之外御年貢之儀は不及申候。御買米村並に出すべし。其外百姓役は有之間敷候」と給人代官等の耕作に便宜を与えた。この種の耕地は奉公人開又は諸士開と呼んでいたが⁽¹³⁾天明には一、六九三貫三百文、

寛政二年には八九七兩の税収があった。

大塚の中の他屋は代官(8)寺嶋喜左衛門が中心となつて慶長十四年から五年間に三七〇余石を開き、五反六畝二十四



犬川村田屋 (平万吉氏宅)

歩の屋敷を設けたのに
 起源する。隣屋敷の縫
 殿助も三〇石九斗五升
 の高持であつた。元和
 三年船山家に売却した
 と伝えられ、現在も青
 木、中村、船山等九軒
 の旧家が残っている。
 同村の東他屋は慶長
 十三年荒開一八〇石の
 藩士小幡善四郎が行方
 六右衛門、村山惣右衛
 門外六名の者と入村
 し、元和九年迄の間に
 二七〇石を開いた土地

である。小幡屋敷は四反四畝二十四歩で二間幅の館堀をめぐらしていた。行方以下の者は小幡屋敷に接して二面に配置されてあった。小幡家の話によると七〇年程前まで二人の小作人の耕す田地が一町歩程残っていたという。行方も十五石の田地を所持していた。

犬川の田屋は蒲生の遺臣で上杉家に隨身し元和になって代官を命ぜられた度部久右衛門の開いたものである。寛永十五年の水帳によると久右衛門は水田一七町五畝歩、畑一町四反六畝を所持し、草高二二八石余となっているが、⁽⁴⁾明暦三年には本石二百石、草高四二五石九斗となっている。荒開二百石を給せられていたのであるが、その外に二二五石九斗の田地を経営していたわけである。

宝曆の張紙ある開拓当初のものとと思われる田屋に残っている古地図によると約五十間四面に近い八反六畝十歩の屋敷があり、その外を三間幅の堀をめぐらし、一方の側に並ぶ左兵衛、左兵衛、藤藏、参郎兵衛、清四郎、伊四郎の六名の者が家中として記され、入口に門番らしい与兵衛なる者が居住していた。この外苗代を隔てて庄兵衛、伝兵衛、清兵衛、助次郎の住宅も記入してあるが、彼等も田二五町三反三畝と三、一〇〇刈、畑五反五畝二七歩を経営するのに使役されていた名子か作人かの何れかであろう。田九反七畝二十一歩と千五百八十刈、畑二反三畝十歩が手作地となっていたが、是れは田屋守の手作地で、内の者作り六百刈は下人の手作地で家中作の畑一反歩はその野菜畑でもあろう。

度部は寛文四年に改易となるが、初代官から寛保三年代官を命ぜられた寺嶋権右衛門が引継ぎ、田屋守として米沢から平源兵衛を入れている。⁽⁵⁾宝曆十三年の宗門改帳によると源兵衛は家族五人であったが、外に名子五人とその家族一〇人、召使年季者を加えた総計は男子三二人、女子一八人の大家族であった。従って当時は田屋守が相当手広く

手作経営をしていたものと見える。今日では名子はなくなつたが堀の泥濘に無償で手伝する者が三軒残つていとう。

(6) 安永の水帳によると源兵衛の支配地は二〇町四反二三歩となり、高も二七〇石九斗二升に減つてゐる。田屋の経営の実権は次第に平家の手に移つたらしく、弘化二年には二百石の残り田地を全部と田屋屋敷共で平家では二百兩支払つたといひ伝えている。

(6) 文政十一年には家族が七人で、召仕五人下女一人となり、弘化三年には家族六人と召仕二人だけとなるのは次第に地主的経営に切り替へている故であらう。

時田には元文二年藩の漆倉係渋谷半右衛門の経営する田屋もあつたが、元禄十二年の記録によると時田の(6)西原には平清左衛門高井左兵衛の田屋もあつた。その草高百十石三斗五升二合とあるから相当広いものであつた。是れは堀金堰が西原まで延びた正保頃に開かれたものらしい。

この外(6)宮崎には代官安部右馬助の田屋があつたが、安部は寛文三年に三十五町歩程の田地の開判形を貰つてゐた。その他沖郷には笹生田屋があり、吉島には長尾田屋があつた。置賜ではこのような武士や豪商等の開拓した田莊集落を田屋と称していたが、盆地の中では比較的新しく成立した開拓集落と称すべきものであつた。

- (1) 山形県史 第二卷
- (2) 鷹山公偉蹟録
- (3) 大塚村 青木源内翁手記
- (4) 河西町 竹田源右衛門氏所蔵
- (5) 河西町大川 平万吉氏所蔵

- (6) 拙稿 上杉藩の郷土集落の研究
山形県郷土研究叢書 第六輯
- (7) 河西町時田 須藤義一氏所蔵記録
- (8) 和郷町宮崎 安部逸記氏所蔵記録